

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 14 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520568

研究課題名（和文）

小中連携の英語教育における教員間の「協働性」に関する総合的研究

研究課題名（英文）

An Analysis of the Collaboration between Elementary and Junior High School Teachers regarding English Language Education

研究代表者

横溝 紳一郎（YOKOMIZO SHINICHIRO）

佐賀大学・全学教育機構・教授

研究者番号：60220563

研究成果の概要（和文）：

2010年～2011年の調査研究により、外国語教育における小中連携を推進するための最も現実的な方法は「中学1年生の入門期（最初の1学期）に、中学校教師がつながりを意識して、授業を行うこと」であるという結論に至った。2012年度に、佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校の入門期の授業を分析した結果、「ゆるやかな移行」と「適度な段差」を意識した授業デザイン・運営が、生徒の英語力及び学習意欲の向上に大きく貢献することが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

Based upon the investigation from 2010 to 2011, it was concluded that the most realistic way to promote the collaboration between elementary and junior high school teachers is the effort by the teachers of the junior high school to operate their English classes, especially in the first semester of the first year in junior high school, with the consideration of the articulation. Through an intensive research of the English classes during the first semester of the first year at *Mitagawa Junior High School* in *Yoshinogari*, it became clear that a 'smooth shift' and an 'adequate level of bump' both contribute to promoting the student's English level and stimulating their motivation to learn.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：

## 小中連携，協働性

### 1. 研究開始当初の背景

2008年3月に啓示された学習指導要領で、小学校高学年における外国語活動が必修化され、その中では「小学生のもつ柔軟な適応性を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培う」ことや「言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語に関する関心を高め、これを尊重する態度を身につけさせること」の重要性が主張されている(菅2008)。このことにより、全国各地の小・中学校、特に「『教育特区でもなければ、行政の強いあと押しがあるわけでもない』ごく普通の学区の小・中学校に、小中連携の英語教育をどのように推進していけばいいのか」という大きな課題が課せられることとなった(竹内2007)。平成17・18年度英語教育改善実施状況調査結果によると、既に小中連携に取り組んでいると回答した中学校は全体の3割程度であり、その連携の中身も、相互の授業を見学し合ったり授業に関する情報を提供し合ったりする程度の「交流」とどまっているケースが少なくない。必修化以降は、小中学校の現場で、さらに大きな混乱が生じることが予想される。この混乱を打開するための指針として、直山(2007)は、「目標の一貫性」「学習内容の系統性」「指導法の継続性」を挙げている。

この3点を具体的に実現するために必要不可欠なのが、教員同士が積極的かつ創造的に関わり合うことである。その関わりなくしては、一貫した目標を立てそれを保持することも、学習内容や指導法を系統的に継続していくことも、不可能となるからである。岡東(2006)は、このような教員間の関わり合いを「協働性」と呼び、「学校および教師に課せられた教育課題をより効果的・効率的に達成していくために、教師が同僚教師と協力的・相互依存的にかかわり合うこと」と定義している。

協働性の実現が小中連携の英語教育の鍵であるとするならば、その実現方法を探求することは必要不可欠であり、「協働の現場で何が語られ、それが教員にどのような変容をもたらすのか」について、豊富なデータの収集と総合的分析を行うことは意義深いという考えの下、本研究は始められた。

### 2. 研究の目的

以下の点を明らかにすることが、本研究の目的であった。

- (1)カリキュラムの作成・学習内容／教材／指導法の選択に関して、小中教員間の対話

はどのように変容するのか

- (2)その変容に影響を与える要因は何なのか
- (3)各教員は、変容のプロセスの中で何を考えているのか
- (4)その考えが、どのような言動となって表れ、変容のプロセスにどう影響を与えるのか

### 3. 研究の方法

2010～2011年は、福岡市内で小中の教員との協働的アクション・リサーチを実施したが、協働性を構築することの難しさに直面し、外国語教育における小中連携を推進するための最も現実的な方法は「中学1年生の入門期(最初の1学期)に、中学校教師がつながりを意識して、授業を行うこと」であるという結論に至った。そこで、2012年は、吉野ヶ里町立三田川中学校の入門期の授業を録画・分析した。

### 4. 研究成果

佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校の入門期の授業を分析した結果、「ゆるやかな移行」と「適度な段差」を意識した授業デザイン・運営が、生徒の英語力及び学習意欲の向上に大きく貢献することが明らかになった。「ゆるやかな移行」と「適度な段差」の具体的実現方法は、以下のとおりである。

#### 「ゆるやかな移行」

##### (1)指導過程の共有

「挨拶→ウォーミングアップ→活動→振り返り／共有→挨拶」という小学校での指導過程を、中学校も基本的に踏襲する。

##### (2)学習活動・手法の共有

小学校でよく行われている「歌・チャンツ」や「TPR」「カルタ取り」などの手法を、中学校でも発展的に実施する。

##### (3)言語材料の共有

新文型導入の際には、小学校における外国語活動で使用した構文や単語を活用し、使用場面を思い出させたり意識させたりすることにより、「これまでに聞いたことがある・初めて聞いたことでもなんとなく分かる」状況を設定する。

##### (4)学習形態の共有

小学校で多く取り入れられている、ペアやグループでの活動形態を、中学校でも多く取り入れる。

- (5) 英語を学ぶことを通して身に付けさせたい素地の共有  
小学校のときに培った「言語や文化、人に対する体験的な理解・受容」を基礎として、中学校ではさらにそれを深化・拡大する。

「適度な段差」

- (1) 帯学習(基礎トレーニング活動)における「適度な段差」

使用する構文に既習と未習を組み合わせることにより、生徒は内容を推測しながら取り組み、同時にその新出構文に気付き、量に慣れていくことをねらう。

- ① Assistant Language Teacher による「Today's Topic」

「聞くこと」による内容把握、新出構文への気付きを促す。談話を段階的に増量し、Today's Topic 後には、その内容に関連した会話練習を行う。

- ② Chants

繰り返し口ずさむことにより新出構文への慣れや、構文や表現の習得を促す。使用構文の難易度を徐々に上げていく。

- ③ 1分間トーク

タスクカードを基に、慣れてきた既習の言語材料を用いて、ペアで30秒～1分間話し続ける活動。

- (2) 音読活動における「適度な段差」

- ① 語彙指導の際の音読活動における適度な段差

単語カードが自力で読めるかを確認した後にリピート練習をさせる。また英語の歌は音のかたまりとして導入しリピート練習をした後、歌詞を自力で音読させる活動を設け、文字と音が徐々に連結していくことをめざす。

- ② 教科書の音読の際のタスク読みにおける適度な段差

音読活動における段差幅を、生徒自身が「音読用ワークシート(教科書本文の一部の表現を虫食い状態にしたものであり、難易度レベル別に3～4種類ある)」を選択したり、read and look up/shadowing/ドラマ読みなどの「タスク読み」の方法を選択したりすることで、自分でレベルを調節しながら音読に取り組み、主体的に表現を習得

するよう促す。

このような「ゆるやかな移行」と「適度な段差」を実現した実際の授業のやり取りを、研究成果報告書(全95頁)にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計6件)

- (1) 横溝紳一郎「初級をやり直す学習者のやる気をどう引き出すのか:小中連携の英語教育から日本語教育へ」日本教育国際研究大会(2012年8月19日、名古屋大学)

- (2) 横溝紳一郎「小中連携の英語教育の産みの苦しき:学習指導要領と現場の混乱に焦点を当てて」日本言語政策学会研究大会(2012年6月9日、麗澤大学)

- (3) 横溝紳一郎・長谷川愛・高橋晶子・中泉友里「英語力向上と笑顔の実現をめざした協働的アクション・リサーチ:英語科教員全員とメンターが共に創り上げる3年間のカリキュラム」日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク全国大会、(2011年11月26日、松山大学)

- (4) 横溝紳一郎「学習意欲を引き出す教材・教え方の工夫:英語教育から日本語教育へ」日本語教育学会第2回研究集会(2011年6月4日、立命館アジア太平洋大学)

- (5) 野山広・井上一郎・菅正隆・横溝紳一郎・大津由紀雄「日本語、国語、外国語教育の連携・協働と言語教育の将来について展望する」平成22年度日本語教育学会秋季大会、(2010年10月9日、神戸大学)

- (6) 横溝紳一郎「小学校高学年対象の英語教育活動で、日本語教師は何かができるのか」日本語教育学会九州・沖縄地区研究集会(2010年6月5日、佐賀大学)

[図書] (計2件)

- (1) 横溝紳一郎「地域で創り上げる小学校英語教育」柳瀬陽介他編著『成長する英語教師をめざして—新人教師・学生時代に読んでおきたい教師の語り—』ひつじ書房、29-35。(2011)

- (2) 横溝紳一郎「教師研究—教師の成長を支援する研修デザイナー—」西原鈴子編『シリ

一ズ朝倉<言語の可能性>第8巻一言語  
と社会・教育一』朝倉書店, 169-192. (2010)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

横溝 紳一郎

(YOKOMIZO SHINICHIRO)

佐賀大学・全学教育機構・教授

研究者番号：60220563

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：